〔書　評〕

柳田征司著『室町時代語資料による基本語詞の研究』

寿岳章子

かつて、そして今も、私は抄物という言語世界に惹かれていることは事実である。やがて古稀に達するという現在、今から五十年も前に、まず湯澤幸吉郎博士の『室町時代語の言語研究』や小林好日博士の『日本文法史』などで抄物の資料価値を一往知った。大学に進学するまで全く触れることもなかったその資料は、きわめて魅力的な性格を多々備えていた。私と日本の中世、そして言語との接触はまず抄物からはじまった。熱心に私はその世界にとりついていった。

半世紀すぎてみれば、逆に私ははじめの頃のがむしゃらな取っつきからいささか後退して、吐息をつきつつ、眺めている感じである。それは越えることの不可能な峨々たる高山にも似ている。いろいろな取りつき口はあるが、少し辿ってみれば、どのあたりのどういう位置にいるか皆目わからず、又下へずり落ちている自分を発見するにとゞまるというていたらくで、何と抄物とは膨大不可解な存在であることよと呆れざるを得ない。かなり以前から、そして現在も私は同学の士のほかに日本史・東洋史の研究者、あるいは国文学者といっしょに抄物を読む機を得たが（史記抄、中華若木詩抄等をテキストにした）、そういう人たちとの学問的交流がいかに私の抄物についての感覚を変化させたかを思うとき、抄物のおそろしさをさえ感じる。何たるベラボーな資料、そのいわばベラボーさは他の諸種の國語資料と隔絶しているとさえ思われるのである。

同じ中世で、そしてそれぞれに日本語以外の領域と深くかかわっていることによる困難さはあっても、キリシタン資料や朝鮮語関係のもの、あるいは狂言とはその理解可能度が全くちがうと思われるのが抄物である。一番確実な研究成果をあげ得るのは、その書誌学的領域であろうかとだけは信じられるが、とにもかくにも一筋縄ではゆかぬ抄物は、そういう特性にもかかわらず戦後多くの研究者を魅了しつづけ、かって新村出、湯澤幸吉郎、小林好日といった大先達の切り拓いた世界を画期的に前進させた。それはおそらく國語史の諸領域中もっともめざましい進展を見せていると思われる。

わずかにとっかかり口の岩を少し欠いてあとは引き下がり、溜息をつくのみの私とはちがう果敢な研究者たちの中でもみごとな成果をあげつづけている人の一人に柳田征司氏がある。氏の近著『室町時代語資料による基本語詞の研究』は、そのタイトルが示すように、もちろん抄物のみならず広範な室町時代の各国語資料、とりわけ狂言にも深くかかわった諸論文によって形成されている。

一般に書評のスタイルは（特に本誌においては）当該書の目次をまず掲げる。何だか字数かせぎめいて気がひける。それなしでやりたいものと私は思ったが、考えてみると、場合によっては目次は本の内容、性格を端的に示すものである上に（それはとりわけこの書においては著るしい）、何よりも読者にとっては便利この上ないことはまちがいない。そこで私もやはりそうする。ただ、この著にまとめられる以前の論文の形態を残して、几帳面に大半の節が「はじめに」と「おわりに」との部分を持っているのは（その節を理解するのに、読者にとってはとても便利な項ではあるが）ここでは省略して、それぞれの節を内容的に紹介しよう。

第一節　『ドウ』（如何）の成立
1　『ドウ』（如何）の成立
2　『ドウ』の開合
3　「タウ」
第二節　「キツク」「キヅク」（城・築）の異形「キツグ」について
——カ行四段活用動詞活用語尾の濁音化を抑止する一つの力——
1　濁音化を抑止する力
2　濁音化の例
3　語幹末濁音節との関係
第三節　「ニッポン」（日本）と「ニホン」
1　二つの説
2　p音の残存と新生
3　ハ行・パ行音韻史
4　「ニッポン」「ニホン」二形の成立と併存
第四節　大蔵流狂言に見える、お礼のことば『有難い』と『忝ない』について
1　虎寛本について
2　山本東本について
3　虎明本について
4　虎清本について
5　その他の諸本について
第五節　虎明本狂言と虎寛本狂言との語彙の比較——困惑の気持を表わす感情語彙について——
1　問題点
2　「気ノ毒ナ」（虎寛本）等について
3　「困る」（虎寛本）等について
第六節　奇妙に見える事象
1　副詞「コンロン」
2　夢の意の「ウツツ」
第七節　進行態・既然態表現の変遷——「アル」「イル」「オル」——
1　問題の所在
2　上代における進行態・既然態表現
3　中古における進行態・既然態表現
4　室町時代中期における進行態・既然態表現
5　室町末期江戸初期における進行態・既然態表現
6　近世以降における進行態・既然態表現
第八節　「カツグ」（担ぐ）と「ニナウ」（担う）
第九節　室町時代における口語語彙と文語語彙——アタマ・カシラ・カウベについて——
1　口語の語と文語の語

2　口語資料における意義用法分担
3　漢字表記の頭・首
4　意義用法分担の来由
5　アタマの意義用法拡大
6　文語資料のカシラ・カウベ

本体は以上である。

さて、私がこの書を手にした最初、まず書名に注目した。まず、「基本語詞」という提示についてである。実のところ、「基本語詞」という概念はも一つ鮮明でない。しかも、「基本」にしろ、「語詞」にしろ、めいめいはきわめてわかりやすい普通の語である。だが、二つが結合した「基本語詞」は何なのか。「基本」あるいは「基礎」という國語学的用語は、それぞれのきっちりした概念規定を持っている。そうしてともに、それは語彙論における概念なのであるが、どうもこの著はそういう分野の問題は扱っていない。

何よりも、書名のよって来たるところについて、柳田説は言擧げされていない。見逃しを怖れはするが、前掲九節中にその問題は特に追求されていない。

また、「による」という形容句が若干のあいまいさを残す。どちらかと言うと、「室町時代語における」ではないのだろうか。通読の印象では、決して多くはないが、幾つかの語の詳細な追求で、室町時代語のある性格を明らかにしているのであれば、何の基本語詞かが題名にあらわれていいのではないか。もちろん室町時代語によって追求するのだから、室町時代語の基本語詞にちがいなかろうが、「による」が割書きにまでなっていて、視覚的に「基本語詞」がぐっと迫ってくるからには、何の基本語詞かが示されてほしいと私は思った。

そして、「語詞」の問題である。実のところ、「語詞」は、筆者はいさゝかその領域にうといので、『国語学大辞典』にあたってみたが、「語詞」はタームとして見出しにあがっていない。すべてにおいてきわめて厳正な立場をとる著者が、敢えてわかりはするが、どこか逃げたような、いささかあいまいな「語詞」をなぜ使ったのか、しかも書名にまで、と思わざるを得ないが、察するところそれにはかなり必然的な理由があるのだろう。あまりそういう用語論に触れていない著者が、僅かではあるが述べている部分もある。第一節『ドウ』の、「四、おわり」において柳田氏はこう言っている。語彙の研究のあり方についてであるが、

(1)体系性の緊密な語彙分野から取上げていくことが、有効であろう。そういう意味では、意義に形態が深くかかわっているような語彙分野は重視されてよい。

(2)語彙研究と語詞研究とを峻別してしまわない方がよい。語彙の総体をいきなりとらえようとするのではなく、その中で鍵となっている一語に注目して、そこから体系をとらえていくとやり方も重んじられるべきである。

とまとめている。そしてその立場で、たとえば「ドウ」が論じられているのである。

柳田氏は、たとえば一定時代の諸文献を調査して、いくつかの論の意味などを論じ、それを集めて「○○の語彙研究」というタイトルを附すというような方法・認識での、ある欠落は十分に存知しておいでだ。しかも、語彙研究、語彙論であるからには、おそらくは統計的方法を駆使した、集合体に迫るような「総体をいきなりとら

え」るやり方のみでは語彙論や語彙史が論じつくされるはずはない、一つ一つの語のもつ問題を十分にときあかすこと、とりわけ形態、意義が深くかかわりあった状況の研究は、語彙論の大切な分野であることを強調している。

そういう一つ一つのことばが持つ全体への視野が広いものが、氏の言う「鍵」性となっていることをこの本は論じているようでもある。奇しくも「語彙研究」と「語詞研究」との二語が対比されていることに私は着目する。「語研究」では工合悪いのだ。語彙論中に、「語詞研究」を入れこむ立場。

私も大いにその方法をよしとする。ただ、単に一語の世界に内的に閉じこもるのではなく、開けてゆく分野への據点となるたしかで有効な視野のある研究でなければならないとは思うが、この書で扱われたさまざまな問題はその氏の立場の有力な証拠となった。

たしかに「基礎語」「基本語」とは何か、使用率が大きく、対象のいろいろな層に通じて出現する語とか、生活の大部分をまかなえるとか、そうした性格を持つ語彙、というような面だけではこの書中に登場する語詞は論じられない。統計学あるいは数学的な世界がかかわる語彙論でない領域を語る、そんな語彙論を著者は手がけたのである。こういう言い方は妥当でないかもしれないが、「定量」に対する「定性」的方法論と言ってよいのではなかろうか。

たとえば、第三節の「ニッポン」と「ニホン」、どっちであっても、いわゆる語彙論的視点からは、「基礎」でも「基本」でもない、現代ならいざ知らず、中世日本人に「日本」の概念など日常的にあったとは思えない。多くの室町人には「日本」などという語はほとんど使わなくて済む語だったろう、因みに私自身は、樺島忠夫氏とともに統計的用法で室町時代語の基礎語彙を作成してみたが、もちろん痕跡だになかった。それは定量的世界の語彙を目途としたからである。

しかし氏は、「日本」をもっておそらく室町時代語の基本の語の一つとした。それは使用率云々の問題などとは全く別に、この語の持つ音韻論的課題こそ室町時代語の基本的性格とした。それはそれで是とすべきであろう。

やはり氏の言う「語詞」は、そういう、いわば豊かな性格を持つことばなのであろう。「語詞」という、いささか模糊たることばに氏の思いがこめられているようだ。

たしかに柳田氏は僅々「ドウ―タウ」「キツク―キヅク―キツグ」「ニッポン―ニホン」「有難い―忝い」「気ノ毒」「困ル」「コンロン」「ウツツ」「アル―イル―オル」「カツグ―ニナウ」「アタマ―カシラ―カウベ」等の十いくつ、見出しにすればもっと少ない語詞をもってその基本性を問う。少しオーバーに言えば大胆でもある。だがかなり十分でもあると考えられる。

九節を通読すれば、たしかに多くの基本的課題が提出され論じられている。音韻・文法・語彙・さらに書誌的なものまで言及されている。そういうことを論ずるにふさわしい語、そして資料。柳田氏の精緻誠実な研究態度が、そういう方法の実りを生み出した。一つの語の徹底的追求がまことに豊饒な収穫を約束するということを私はあらためて認識した。室町時代の言語の研究の戦後の進展をあらためて知るに至った。

もちろん、どの節にもなおさまざまな注文をつけることは出来よう。たとえば冒頭の「ドウ」〝膨大な量の抄物のあれこれ（敢えて言うが、平安時代の各資料のように索引があるわけでもなく、辞書にも以前

とは比較にならず中世語が出典つきで記載されるようになったとしても、それは依然として恣意的なものにすぎない）を文字通り博捜して得た貴重な少数例が何を語るか、鮮やかな処理を見せてもらったのだが「ドウ」なり「ダウ」なり、その語そのものの出現にも論及してもらいたいと思う。コソア、あるいはカサアにどうして「ド」という濁音で始まる語が入りこんだのか、氏の、「ドウ」や「ダウ」と出現期、そしてロドリゲス大文典にある実に不思議な「タウセイカウセイ」との関連、実に叮寧にすべて論じられているが、その「ド」や「ダ」はどうして出現するに至ったのか。そちらには至って疎い私は昔勝手にかついとも単純に、「イヅレ、イヅコ」の語頭母章の脱落が、深くかかわって不定称を作り出したのかと思っていたが、その辺りのことも推してほしかった。

「日本」の両発音については、氏の論述をもってしても、あるいはなお別の論を立てる向きもあろうか。仄聞すれば、中国語関係の方面で鋭い論もなされているとか、将来のそういう豊かな論のとびかいに、やはり柳田氏の到達した位置はこれからの新展開を大いに約束するであろう。

それほど明確に論じられたのではないが、言語生活関係にも相当な関心が示されていることは有難いことであった。狂言のお礼のことば論は、又違った世界への旅立ちの起点となるかもしれない。「人に礼をのべる」ことばなど、文学書などには具体的にはほとんど述べられることはない。もちろんこの書は狂言各本とのかかわりにおいて問題を論じられているのだが、氏の教示はまたいろいろの新しい視点を与えるのではなかろうか。とにかくこれだけの実証的な論述は、思いもかけない別の世界を約束してもらえそうでもある。

いずれにしろ、この書が浮かび上がらせた「基本的性格」。それが、室町時代語資料によって知ることが可能なのであれば、それは何とおもしろい諸問題であろうか。国語史における中世の重さを改めて感じざるを得ない。柳田氏はそのことをあらためてたっぷりと私たちに教えた。度々出てくる開合のこと。開合問題は中世語を扱う際の重大なキイであることを痛感した。あるいは波行子音のこと。そして同義語の世界での形態の問題。あるいは語彙論的課題でのコンロン。等々、中世語研究の醍醐味が語られるのであるが、それらはすべて、抄物以下各種の個性ある室町時代語資料が語るのである。柳田氏は、資料のその語りを引き出した。とっぴな比喩で恐れ入るが、棟方志功は自分が彫るのでなく、木の中にあるものがおのずと出てくるのだと言ったが、ちょうどそのように中世語資料のおもしろさを氏は我々の前にくっきりと描き出した。棟方志功でなければ、素材にひそむ形は出現しなかったように、ちらっとした影のようなものをくっきりと具体的な姿に仕上げることのおもしろさを読者は十分に知ったであろう。

とすれば、私が先にいささか文句をつけた「による」という捉え方はやはり大切な捉え方なのかもしれない。室町時代語資料はこれこれしかじかの世界を提示するのだという一種の資料論であるなら、やはり我々は氏の思いを大切にせねばなるまい。

さて、最後に「附録」についてのべよう。一の狂言の直喩一覧及び語詞索引は、多くの人を楽しませよう。実は私もこの問題に以前から関心を持っていた。柳田さんも！という感じであるが、室町人のレトリック感覚を論じたりするときに大いに役立つ資料提供であろう。私はさらに狂言中の「引用」にも心を惹かれている。

附録という風につけたりめくが、附録はほかに「諸論文の取り上げた抄物、狂言詞」という項があって、論文一覧と語詞索引を含む。もちろん一番最後にはこの書の索引があって至れり盡せりである。全部で附録はこの本のほぼ三分の一を占める膨大なもので、附録などいう軽いものではない。氏の真骨頂とでも言うべきであろうが、何と便利なものよとただ感心する。国語学史の一コマを見るようで、中世語研究者にとってたゞありがたいの一語に盡きるであろう。まことに綿密なものであって、誰にも出来ることではない。

深甚の感謝をもった上で、欲深いことをいわせてもらおう。抄物語詞を取り上げた論文も、それが一本にまとめて収められている場合は列挙から外され、たゞ書名のみ上がっている。紙幅の都合上むりからぬことであるが、いっそまるごとお世話になりたかった。私事に類して恐縮だが、私のちょこっとした「ガンクイ」をひいてもらって、他のもろもろが『室町時代語の表現』でおしまいなのは何だか残念である。自分のことはいいとして、他の方々のについては、この書の並びで一目瞭然であればどんなにありがたかったろう。簡単でいいのだ、「それぞれの書に索引が付されているから」とのことであるが、それぞれの書の詳しいのよりタイトルに出てくる語だけでもてっとり早く知りたいのになと思ってしまうのは、私の怠け心でもあろうか。

再び「ニッポン」と「ニホン」に戻る。私はこの節がとりわけおもしろかった。私の苦手の音韻史が深くかかわっているだけに、きちっと教授して頂く感を深くしたが、それにつけても思いだすことがある。ごく若い時、何かで、新村出博士のニホンかニッポンかの論考を読んでとても楽しかった記憶がある。それが何に記載されていたのか（とても分厚い本だった）全く忘れてしまった（その時は自分が国語学専攻者になるとも思いもしなかったはるけき昔）。今回少々思い出して、新村出全集をたずね、どうにかそれらしきものをえらび出したが、新村博士は度々この問題を短いものも含めて論じている。

対外意識旺盛な時はニッポンというような結論だったが、いずれにしろ昔論じられていたこの問題の別の視点も、今のように高いレベルでの研究に交えてもよいかもしれない。というようなことになると、個々の論文名もすぐ知りたくなる。『東方言語史叢考』、『新村出全集』に収むだけではやはり物足りない。

それにしても、「諸論文の取り上げた抄物・狂言語詞」の豊かさ。柳田氏は更にその語詞の索引も附されたので、いわば戦後の室町時代語研究史を具体的に知ることができる。さながら仰ぎみる大先輩の方々からごく若い気鋭の研究者に至るまで、室町時代語に注がれた情熱の海に遊ぶ思いがある。

中世なんておもしろくないと私に感想を語った先輩があったが、私はその時必死に中世語の魅力を語って抗弁したものだ。今、この書を前にして、たとえば上代や中古の言語世界とは全くちがうユニークな日本語の世界をあらためて知る思いである。混乱はしていてもその多様性が大きな流れを作り、日本語のさまざまの可能性が湧き出る強いエネルギー、そしてそれを如実に示すさまざまの多角的な言語資料。そういう問題をすっきりと力強く示してもらった柳田氏のこの書を大いに評価する。

（92・12・17記）

（平成三年七月三十一日発行　武蔵野書院刊　A5判　四〇四頁　一四〇〇〇円）

（平成四年十二月十九日　受理）